設立55周年を迎え

情報・知識収集　経営意識高める

内藤　明人 氏
（リンナイ会長）

―名古屋産業人クラブが設立55周年を迎えました。

「1958年は、戦後2度目の好景気が始まった年で躍動感があった。そういう中で当地区産業界を代表する約80人の発起人が、名古屋工業倶楽部を設立した。初代会長は産業界の重鎮で私も尊敬していた故村岡嘉六さん。当クラブは今では当地区で最も歴史ある異業種交流団体として存在感が高い。一緒に活動してきた会員や、多大なご指導とご協力を賜った関係各位に感謝したい」

―活動で重視していることは何ですか。

「優良工場の見学会や講演会、国内外での産業視察など活発に事業を展開している。行事を通して、情報や新知識の収集を図り、会員相互の交流促進を深めている。そして企業経営者や経営幹部の経営意識を向上し、産業界の発展に寄与することを目指している」

―企業を取り巻く環境が激変しています。

「厳しい時こそ経営者の力が問われる。同じことを続けていては駄目。長くても20年だ。人間は20歳で成人し、責任を負う大人になる。伊勢神宮は20年ごとに式年遷宮をやる。要は、変化して次の時代に備えなさいということ。勉強を続け先見の目を養うことが大事だ。産業人クラブの活動がきっと役に立つ」

―ビジネスを展開していく上で大事なことは。

「自分だけもうかればいい、うまくいけばいいではなく、ユーイズムの精神が大事。長期にわたってビジネスがスムーズにいく秘訣と言える。それに加えて自分の哲学を持つこと。外国では哲学の影響が大きい。哲学のない国では宗教がその代わりになっている場合も多いが、日本はそうでもない。海外進出の時は、特に相手の立場に配慮すべきだ」

―名古屋産業人クラブならではという特徴は。

「名古屋には多数の県が出先機関を置いているが、その中で15の県が会員だ。名古屋事務所を閉鎖した県もあるが大阪事務所を窓口に、引き続き参加している。また、独自の顕彰制度『永井嘉吉記念賞』を設けている。優れた経営手腕を発揮している中小企業経営者を毎年1人、会員の中から表彰するもの。すでに29人を表彰した。同制度は当クラブ2代目会長の故永井嘉吉氏の遺族からの寄贈を基金としている」

―女性部会の活動も活発ですね。

「幅広い業種から女性経営者が参加しており独自の活動を続けている。クラブ全体での行事にも積極的に参加する人が多い。最近は大阪産業人クラブ女性部会と交流を深めながら、互いの自己研さんに努めている」

―愛知県はモノづくりで日本一です。

「当クラブの会員の80％近くがモノづくり企業だ。ただ、これからは参加会員の業種の幅を広げていく必要がある。『鉄を削って』というだけでは限界がある。バイオ関連、ナノテク、環境など有望な分野にもっともっと目を向けていい」

会長インタビュー

名古屋産業人クラブ

概　要

◇1958年（昭33）2月13日設立　会員数163人
◇事務局所在地 ＝ 名古屋市東区泉2の21の28
（日刊工業新聞社名古屋支社内）
◇電話 ＝ 052・931・6151

特集・挑戦する日本の経営者たち

技術革新・新時代に対応

激動期乗り越え　産業発展に寄与

名古屋産業人クラブ（内藤明人会長―リンナイ会長）は、1958年（昭33）2月に設立された名古屋工業倶楽部を前身とし、今年55周年の節目の年を迎えた。これを機にさらに会員を増やし、組織の拡充を図る方針だ。さらにさまざまな会員ニーズに合わせて各種講演会や工場見学会、海外視察など多彩な事業展開を計画している。

名古屋産業人クラブは会員相互の親睦を図り、広域的活動を通じて地域経済と日本の産業の発展に寄与することを目的に設立された。これまで業種や規模をこえて交流し、経済・経営・技術など幅広い分野にわたって技術革新の新時代に対応できる情報交換を続けてきた。

当初は「名古屋工業倶楽部」の名称でスタートしたが、1985年に全国各地にある工業人クラブの横の交流を深めるため「日本工業人クラブ連合会」（本部―東京）が結成されたのを機に「名古屋工業人クラブ」に名称を変更した。その後、90年度から全国的に「産業人クラブ」の名称に変更することになったのに合わせ、名古屋産業人クラブに改称し、現在に至っている。

名古屋工業倶楽部が設立された昭和30年代は「もはや戦後ではない」といわれ、各企業は競って技術革新に拍車をかけた。欧米の先進企業からの技術導入も盛んに行われ、産業の重化学工業化が着々と進められた時代であった。

中部地区の産業界も同様の動きをみせていた。その代表的なものが東海製鉄（現新日鉄住金名古屋製鉄所）である。この東海製鉄の誘致により、名古屋南部臨海工業地帯の重化学工業化が進められた。

もうひとつ、見逃してならないのが自動車をはじめとする輸送機工業の隆盛である。自動車工業は日本の産業界の基盤を支えるまでに成長した。幸い愛知県にはトヨタ自動車があり、同社とその関連企業が地域産業の発展をリードしてきた。

名古屋工業倶楽部が設立された後の昭和33年7月からは、戦後2回目の好景気が始まり、36年12月まで42か月続いた。日本経済が右肩上がりに成長していった時代だった。この景気は、後に「岩戸景気」と名付け、大量生産・大量消費時代の幕開けであったといえる。

こうした経済情勢を背景に、経営や技術に関する新知識を求める経営者が集まり、産業界を発展させようと力強く立ち上がったのが、名古屋工業倶楽部の会員であった。それから55年が経過し、日本の経済・産業界は、当時とは比較しようもないほど飛躍的な発展を遂げた。

しかし、その発展過程は一本道ではなかった。不況に苦しんだ時もあり、高度経済成長を満喫した時もあった。いわば山あり谷ありの激動期であった。

こうした経済の移り変わりのなかで、名古屋産業人クラブは地道な努力で活動を続けてきた。これまで実施してきた事業の一つひとつは、それぞれの時代の世相が反映され、会員の要望を織り込んだものばかりである。

各種講演会や工場見学会の開催をメーンに、タイムリーな学習会や国内外の産業視察も実施。こうした行事を通して会員相互の連携と親睦を深め会員企業の発展に寄与してきた。

世相・会員の要望 活動に反映

連携と親睦深める